



連・載・コ・ラ・ム

子育てを考える

第1回

子どもは子どもの中で子どもになる

香川大学生涯学習教育研究センター
センター長 清國 祐二

毎月第3土曜日に栗林コミュニティセンターでプレーパークを開園しています。栗林おやじ塾が主催する活動のひとつですが、地域の温かい眼差しに支えられながら9年目を迎えています。これから3回にわたって、プレーパークの「親分(おやぶん)」こと私が、子どもや親の育ちについて語ります。まずは、子どもの成長と遊びについて。

活動プログラムのない遊び場がプレーパークの特色のひとつです。子どもにとって必要な環境は、子どもの遊びの好奇心を自然なかたちで引き出せる場ではないでしょうか。そもそもデンマークで誕生したプレーパークは都市の廃材置き場でした。遊具ではなく、廃材が子どもの遊び心をくすぐることは、物がなくても豊かに遊んでいた子ども時代を過ごした人であれば深くうなづけます。楽しみは与えられるより、見つけたら、つくった方が楽しくないですか?では、具体的な場面から。

寒い時期に流行る遊びは、「火遊び」です。「子どもに火を使わせるの?何て危ない!」という声が聞こえそうです。実際、火は危険ですね。火を扱ったことのない子どもも多くいますので、熱くなったものを触って軽い火傷をしたり、ビニール製のズボンが「ジュツ」と溶けたり、炎に近づきすぎて髪の毛や眉毛が焦げたり、いろいろ発生します。火は私たちの生活になくってはならないものですから、上手に付き合い、大事に至らない怪我もしつつ、多くのことが学べればと思っています。

つい最近のプレーパークでの出来事です。ふたりの男の子が砂場で棒の取り合いになって、どちらも引っ張り合って譲りません。怒ったひとりの男の子が逆向きに棒を押して、もうひとりが転びました。激高した男の子が蹴ったり、突いたりし始めたところで、「おい、いい加減にせえよ。」と親分がやや威圧的に介入することになります。でも、少ししてふたりに目をやると、蹴っていた子ども



を見るとホッとしますね。

多くの大人はトラブルを極力回避するよう、先々を考えて行動します。相手のことを思いやって、引いたり譲ったりもできます。それが上手にできる人は子どもの頃に乗り越える力を身に付けているのだと思います。子どもが成長する上で、同じような子どもの

の方が「これ使う?」とスコップを手渡していました。大人が謝らせたり、仲直りの握手をさせなくても、子どもは遊びながら関係を修復させる力もっているのです。こんな光景

中で育つことはとても重要です。さまざまなトラブルを乗り越えて、いろいろな感情を育み、友だちと折り合いをつけながら成長できる自由な遊び場を確保することが大人の役目ではないのでしょうか。

清國 祐二(きよくに ゆうじ)

2002年 転勤で香川大学へ
2003年 栗林プレーパークを開始
2010年 ロンドンのプレーパーク訪問

現在 香川大学生涯学習教育研究センター長
中央教育審議会生涯学習分科会委員
香川県社会教育委員の会 会長 など

